中世ヨーロッパの伝説
――（1）カロリング朝――

高木昌史

［註］本稿は、（1）カロリング朝、（2）『エッダ』の系譜、（3）『ゲスタ・ロマノールム』、以上三部から成る表題論文の第一部である。

序

多くの論議を呼んだ論文『キリスト教世界あるいはヨーロッパ』Die Christenheit oder Europa（一七九九年）の中で、ドイツ・ロマン派の詩人ノヴァーリス Novalis（本名フリードリヒ・フォン・ハルデンベルク Friedrich von Hardenberg 一七七二―一八〇一年）はかつて次のように述べた。「ヨーロッパが一つのキリスト教の国で、単一のキリスト教徒がこの人間的に形作られた大陸に住んでいた時代は、美しくも輝かしい時代であった。一つの大きな共通の関心がこの広大な宗教的王国の辺鄙な地方をさえ結びつけていた。世俗的な大所有を持たないままに、一人の指導者が大きな政治的諸勢力を導き統一していた」［傍線部は原文イタリック体］[1]。

ヨーロッパを〈統一体〉と観るこの見方は、「ヨーロッパ連合」die Europäische Union［EU］が存在する現在では、もちろん右の一節とは異なる意味ではあれ、ますます今日的だが、ノヴァーリスの念頭にはおそらくカール大帝 Karl der Große［フランス名シャルルマーニュ

Charlemagne］（七四八―八一四年）のイメージがあったにちがいない。なぜなら、現代で言えば、ドイツ、フランス、イタリア、オランダ、ベルギー、スイス、オーストリア他、スペインの一部を含む未曽有のフランク王国を築いたのは、教皇レオ三世から西ローマ皇帝の帝冠を受けた（八〇〇年）カール一世［大帝］に他ならないからだ。[2]

カール大帝の時代から一千年を経た一八〇〇年前後のドイツにおいて〈ヨーロッパ〉という観念あるいは構想を抱いたのはノヴァーリスだけではなかった。この詩人の親友で、ロマン主義の旗手とも言うべき批評家フリードリヒ・シュレーゲル Friedrich Schlegel（一七七二―一八二九年）は、ノヴァーリスが夭折したあと、その遺志を継いで、一八〇二年夏パリへ赴き、約二年間当地に滞在して、文芸雑誌『オイローパ』Europa［＝ヨーロッパ］（一八〇三―一八〇五年）を刊行、文学、美術、文化論等のエッセイを次々に発表した。[3] シュレーゲルはパリで私的な講義『ヨーロッパ文学史』Geschichte der europäischen Literatur も試み（一八〇三／〇四年）、また古いプロヴァンス語手稿の調査を進めながら、ロマンス語文献学の基礎を築いた（E・R・クルツィウス）。[4]

ところで、シュレーゲルがパリで活躍していた頃、初期ロマン派の人たちよりもほぼ一世代（十二年）後輩で、ハイデルベルク・ロマン派のヤーコプ Jacob（一七八五―一八六三年）とヴィルヘルム Wilhelm（一七八六―一八五九年）のグリム兄弟 Brüder Grimm は彼らの古代ドイツ研究を本格的に開始し、その一環として昔話や伝説の収集・分析を進めていた。そして二十二歳のヤーコプは処女論文『古い伝説の一致について』Von Übereinstimmung der alten Sagen（一八〇七年）[5] を発表、ノヴァーリスが詩人の想像力で描いていた〈ヨーロッパ〉像を、文献学的に歴史の深みから照らし出すことになる。さらにその約十年後、グリム兄弟は彼らの『ドイツ伝説集』Deutsche Sagen 二巻（一八一六／一八年）（以下ＤＳとも略記）[6] を刊行し、『子供と家庭の童話集』Kinder-und Hausmärchen（＝グリム童話集、初版二巻、一八一二／一五年）（以下ＫＨＭとも略記）[7] と並ぶ伝承文学の金字塔を打ち立てた。ＤＳ第二巻にはゲルマン民族の大移動から神聖ローマ皇帝時代にかけての貴重かつ興味深い伝説が多数収録されているが、中でもカール大帝をめぐる物語は圧倒的である。[8] 本稿では、この伝説集も参照しながら、前述論文『古い伝説の一致に

ついて』においてヤーコプが特に注目した三つの伝説を紹介する。歴史と昔話との中間に位置して、物語の視点から〈ヨーロッパ〉を浮き彫りにしてくれるジャンルとして、伝説は大帝の時代、特に重要な役割を果たしていると思われる。

『古い伝説の一致について』

一八〇七年、『新文芸新聞』Neuer literarischer Anzeiger紙三六号に発表されたヤーコプ・グリムのこの論文は、幾つかの観点から興味深い。第一に、この論文がその後のグリムが樹立することになる文献学の特性を示していること、第二に、彼がそこで中世研究にとって核心的な部分を発見していたこと、第三に学問の根本的な目的を述べていること、以上三つの理由からである。第一の点に関しては、グリムの文献学が当初からグローバルであることが肝要である。これにはヤーコプの並外れた語学力が関係している。[9] 右の論文の中でも、中世ドイツ語を出発点に、中世ラテン語文献（ボヴェのヴァンサン等）、古フランス語や初期英語の文献、古代北欧語（サガ）等々が自在に引証されている。第二の点は、第一の理由と関連して、ヤーコプの中世研究が、ドイツに限定されず、ヨーロッパ規模で展開される中、その源流をカロリング朝のフランク王国に発見していた事実である。本稿はこの問題を中心に扱うが、本論に入る前に、第三の点、すなわち、文献学の目的に関するヤーコプの言葉をここで確認しておくことにしたい。

『古い伝説の一致について』末尾で彼はこう語る。「昔の出来事の反響はむしろ民族全体に広まっており、あらゆる機会に、おのずから無意識なやり方で、己を告げる」。[10] 今日的に言えば、伝承文学はグリムにとって、民族的なレヴェルでのいわば〈集合的無意識〉（C・G・ユング）[11] を研究する学問に他ならない。その際、彼が採った方法は〈比較〉である。L・デネケも指摘するように、グリムは出世作となったこの論文で「国際的なモティーフ研究の最初の試み」[12] を実践したのである。

以上を確認した上で、古い伝説の具体例に眼を転じると、論文冒頭、ヤーコプは中世ヨーロッパに広く流布していた『アミクスとアメリウス』（アミとアミル）の物語に触れ、こう言う（それらのテクストの）「個々の特徴の多くは、［……］真の詩的な要素あるいはその叙事的な性格の確か

な証明として、古い詩の中では数え切れないほど反復される」[13]、と。グリムは何より、古い「伝説」（ここでは広義の〈物語〉の意）の類話の多さに着目する。ちなみに、この論文から一世紀あまり後、フィンランド学派のアンティ・アールネが昔話のタイプ分類を試みたことを想起すれば[14]、ヤーコプの着眼点がいかに正鵠を得たものであったかが分かる。

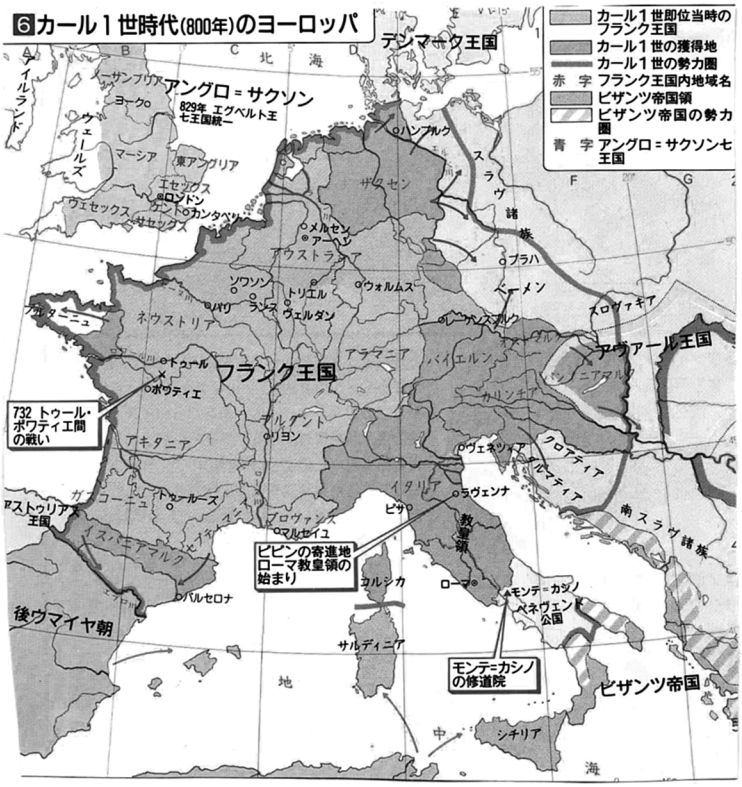
さて、彼は続ける。「古い物語においては、次のようなことが何としばしば起こることか。例えば、罪のない王妃、あるいは生まれたばかりの子供が粗野で残酷な召使いたちに預けられ、彼らによって暗い森の中で殺されることになる。しかし、殺害者である家来は突然、同情を覚え、命じられた殺害のしるしは持ち帰らなければならないので、お供の子犬や山羊などの心臓と舌を引き抜く。そうした例はヴィルキナ・サガ、大きな足のベルタの物語、トリスタンそしてゲノフェーファに関する民衆本に載っている」[15]。

以下、本稿では、右に名の挙げられた『アミクスとアメリウス』、『大きな足のベルタ』そして『ゲノフェーファ』の三篇を、物語の舞台となった場所を地図で確かめながら、詳しく見てゆくことにする。その際、グリムの他の著作、とりわけ『子供と家庭の童話集』（ＫＨＭ）を頻繁に参照する。伝説と昔話が出会う場は、集合的無意識の所在を探る上に、貴重なヒントを与えてくれるにちがいないからだ。

1 『アミクスとアメリウス』
Amicus und Amelius

『古い伝説の一致について』の中でヤーコプ・グリムが先ず例証として挙げた表題の物語を、現在刊行中の『昔話百科事典』Enzyklopädie des Märchens（以下ＥＭと略記）から初めに紹介したい。（地図１参照）

オーヴェルニュはクレルモン出身のアメリウスと、ガスコーニュはブライエ出身のアミクスは、若き貴族として、カール大帝の甥、ポワチエのガイフェルス王の宮廷にやって来る。生涯かたく結ばれた彼らは、死してなお、周知のように、モルタラ（の墓）に相並んで安らっている。さて、アメリウスと王女ベリアルデとの恋は廷臣アドラドゥスによって王妃ベルタに密告される。王は裁判による決闘を命じる。アメリウスは、その間故郷にいたアミクスに助太刀を頼む。容姿も声



地図1

音も友にそっくりなアミクスは、その闘いを引き受ける。アメリウスはアミクスの奥方の許にとどまる。ひと振りの剣が夫婦の寝床の彼らを分ける。宮廷では二人の戦士が宣誓をする。詳細に描写された闘い（二〇四行の詩句の中、何と八一行！）は、アミクスの勝利に終わる。王女は彼の折れた剣を、かつてローランの剣であった彼女の父親の剣と密かに取り換えていたのだった。友人らはふたたびその役割を交換する。アミクスは何年か後、癩［ハンセン］病に罹る（動機づけはない！）。奥方から追放されて、彼はアメリウスの許へ逃げる。医師たちは子供の血が唯一の治療薬だと言う（ハルトマン・フォン・アウエ『哀れなハインリヒ』）。アメリウスは彼の息子たちを殺し、友の病を治す。母親は子供たちが赤い林檎で遊びながら生きている姿を発見する。その後［彼らは］長い間幸せに暮らす。[16]

『アミクスとアメリウス』の最古のテクストは、一〇五〇年頃の武勲詩 Chanson de geste に遡ると言われる。[17] 右に紹介したストーリーはラドゥルフス・トルタリウスのラテン語『書簡集』Epistolae（一〇九〇年頃）のものである。この物語には、その後、教皇、巡礼、奇跡等の要素が加味され、一種の聖人伝に改造された。また一一〇〇年頃には、ラテン語による『アミクスとアメリウスの生涯』Vita Amici et Amelii が書かれ、それをボヴェのヴァンサン Vinzenz von Beauvais（一一九〇頃―一二六四年）が要約したテクスト（『歴史の鑑』Speculum historiale 第二四書）を、グリムは前述論文で参照している。[18]

十三世紀初頭成立のフランス語版『アミとアミルの友情』（神沢栄三訳）[19] は聖人伝の物語で、その冒頭には「ときはフランク人の王ペパンの御代」と記されている。ヤーコプの論文『古い伝説の一致について』「原註」の中でも、この旨（『アミクスとアメリウス』の出来事が「ピピンの時代」のものであること）が記されている。[20] 要するに、物語はカロリング朝の始祖ペパン＝ピピン三世（七一四―七六八年）の頃に由来するようだ。

『グリム兄弟の蔵書』Die Bibliothek der Brüder Grimm には次の文献が収められている。

＊AMIS et AMILES und Jourdains de Blaivies.2 altfranzösische Heldengedichte des kerlingischen Sagenkreises. Nach d.Paris. Hs.zum 1. Male hrsg.vonConrad Hofmann. Erlangen, 1852. [1319]

『アミとアミルおよびブレヴィエのジュルデン、カロリング朝伝説圏の古フランス語英雄詩二篇』初めてのパリ手稿に拠る、コンラート・ホーフマン編、エアランゲン、一八五二年［一三一九番］[21]

さて、ピピン三世はカール大帝の父で、ロンバルディア人に打ち勝って、ラヴェンナ地方等を教皇に寄進し（ピピンの寄進）、教皇領の基礎を築き、カロリング朝の土台を固めた人物である。聖者伝『アミクスとアメリウス』の背景には、そうした時代の動向が反映されている。初めに紹介した『昔話百科事典』（ＥＭ）の物語では、舞台はポワチエ Poitiers（現在ヴィエンヌ Vienne 県）のガイフェルス王（カール大帝［＝シャルルマーニュ］の甥）の宮廷で

あるが、邦訳『アミとアミルの友情』ではシャルル［マーニュ］その人の宮廷となっている。ＥＭの解説にあるように、この時代の伝説では、カール大帝と彼の父ピピン三世および、さらにその父（カール大帝の祖父）であるカール・マルテルはしばしば混同されているが[22]、カール・マルテルがイスラムの侵入を食い止めたのがポワチエであり、ポワチエのあるアキタニアを征服したのがカール大帝である。『アミクスとアメリウス』伝説はその頃に舞台が設定されている。

この物語は大きく分けて二つの部分からなっている。主人公たちの友情を描く前半と、子供の血で癒される癩［ハンセン］病をめぐる後半である。グリム兄弟は彼らの『子供と家庭の童話集』（ＫＨＭ）「原註」の中で、二度この中世伝説の名を挙げている。一つはＫＨＭ六〇番「二人兄弟」Die zwei Brüder、もう一つはＫＨＭ六番「忠臣ヨハネス」Der getreue Johannes である。ＫＨＭの最長編六〇番「二人兄弟」の粗筋はこうである。

金持ちの兄と貧乏な弟がいる。後者には二人の子供がいたが、ある時、邪悪な前者の策略で森に置き去りにされ、狩人に保護される。彼の許で狩猟を学び成長した子供たち（兄弟）は修業に出る。森で動物を仲間にし、安否が分かる短刀を目印として木に刺し、二人は別れる。都に着いた弟は竜の人身御供となっていた姫を、動物たちの援助で救い出し、王様から彼女を嫁にもらい、王国を継ぐ。彼（若い王）は森に狩りに出かけ、魔女に出会い、石に変身させられる。木に刺した短刀から弟の危機を知った兄は都に行く。弟と似ていた兄は若い王と間違えられたために、若い妃（弟の妻）との間に両刃の剣を置いて寝る。弟の救出に森に出かけた彼は、魔女を退治し、石となっていた弟を生き返らせ、一緒に城に帰るが、兄が妃と寝たことに嫉妬した弟は、事情を知らず、兄の首を切り落とす。動物［兎］が採ってきた薬草で兄は生き返る。その後、妃から両刃の剣のことを聞いた弟は兄の貞節を知り仲直りする[23]。

ＫＨＭ六〇番の「原註」にグリムは次のように記している。「この昔話は血盟の友の伝説を含んでいる。その伝説は『哀れなハインリヒ』の我々の版一八三―一九七頁に詳しく説明されている。二人の子供は同時かつ数奇に生まれ、互いに瓜二つである。彼らが別れる際の印、すなわち木に

刺したナイフは、『アミクスとアメリウス』の黄金の盃に対応する。本来それはおそらく、血盟の友の血を飲むために血管に傷をつけるナイフだったのであろう。［…］家で一方は他方の身代わりをして奥方の傍で寝るが、剣によって臥床を分け隔てる。一方を襲い、彼を人間社会から追放する病気は、ここ［『二人兄弟』］では魔女の魔法である。魔法は人を石に変え、他方はその魔法を解く。『忠臣ヨハネス』（六番）を参照」［傍線部は原文イタリック体］[24]。

見られるように、グリムは『二人兄弟』の祖型を、カロリング朝時代の『アミクスとアメリウス』伝説に発見し、そこから昔話に典型的な幾つかのモティーフを摘出している。右の引用文中、「血盟の友」Blutsbrüderschaftとは、互いに血を混ぜた盃を飲み合って平和と友情の強い絆を結ぶ古代ゲルマン人の慣習で（HdA, Bd.1）[25]、『二人兄弟』の一場面に、グリムはその遥かな痕跡を探っている。

『二人兄弟』のいま一つのモティーフ「剣」に関しては、ヤーコプ・グリムの著書『ドイツ法律故事誌』Deutsche Rechtsaltertümer（一八二八年刊）の「剣」Schwertのシンボル性（「序」第四章）の項が次のように説明している。「古代においては、男性が触れるつもりのない女性の脇に寝るときは、ひと振りの剣を自分と女性の間に置くのが慣習であった[26]」。〈貞節のシンボル〉symbolum castitatis と呼ばれるこの慣習の例を、ヤーコプは同書の中で、ゴットフリート・フォン・シュトラースブルクの叙事詩『トリスタンとイゾルデ』（一七四〇七～一七行）、アルニム／ブレンターノ編の民謡集『少年の魔法の角笛』（第二巻、二七六）、バジーレの昔話集『ペンタメローネ』（一―九）等々から引用する[27]。古代ゲルマンの慣習法を専門とした彼の眼には、物語を透かして、絶えず、往時の歴史的な現実が蘇ってくるかのようである。

さて、『アミクスとアメリウス』は、以前から伝承されていた「二人兄弟」型と「忠実な召使」型を理想的な友情物語に合体させたものと言われている[28]。KHM六『忠臣ヨハネス』は後者のタイプの典型で、内容は次の通りである。

老王が臨終の床で忠臣ヨハネスに、禁制の部屋を王子に覗かせないように命じて死ぬ。しかし禁を破って部屋を覗いた王子は、そこに飾られていた「黄金の屋根の国の王女」の立像に恋し、ヨハネスの助力で、その国へ出かけ、彼女を連れて帰国する。途上、忠臣は鴉の会話から、若き

王と王女の恐ろしい運命を知る。ヨハネスはそれを阻止しようと尽力するが、王の誤解を招き、死刑を宣告され、その執行直前、すべてを打ち明け、石と化す。ヨハネスの忠義を知った王は王女と結婚し双子を儲けるものの、忠臣を生き返らせたいと願う。石となったヨハネスが口をきき、王が双子を生贄に捧げれば自分は生き返ると告げる。苦悩の末、王はわが子を犠牲にして忠臣を蘇生させる。後者は王の真心に感謝し双子を蘇生させる。[29]

グリムは『忠臣ヨハネス』「原註」の中で解説する。「これは明らかに忠実な友人たち、『アミクスとアメリウス』の伝説である。一方は他方のために自分を犠牲にして、一見不正なことをする。それに対して、今度は後者が前者を助けるために、わが子らを犠牲に捧げる。しかし、奇跡によって子供たちの生命は維持される。『哀れなハインリヒ』において純真な乙女が犠牲となっているように、我々の昔話では忠実な師匠が、老ヒルデブラントがディートリヒのためにそうするように、犠牲となる」。[30]

中世伝説『アミクスとアメリウス』は『忠臣ヨハネス』の昔話にも関連性を持っていたのである。ここでは、『旧約聖書』のアブラハムとイサクの物語のように、わが子の犠牲という究極の選択を迫られた王が、友情あるいは真心ゆえに、それを実行し、結果的にイサク同様、子供も救われる。

ところで、『二人兄弟』は様々なモティーフの組み合わせによって長編を構成している。アールネ／トンプソンの『昔話のタイプ』The Types of the Folktale では、AT五六七「魔法の鳥の心臓」The Magic Bird-Heart、AT三〇〇「竜殺し」The Dragon-Slayer およびAT三〇三「双子あるいは血を分けた兄弟」The Twins or Blood-Brothers、以上三つの話型を含んでいる。[31] 特に最後のAT三〇三は、クルト・ランケの研究によれば、七七〇もの類話が伝承されていると言われ、[32] 世界に広く分布するシンデレラ型（AT五一〇）に勝るとも劣らない数である。〈友情〉はそれだけ、昔から人間が生きてゆく上で貴重なものであったのだろう。特に、民族あるいは血族の間の闘争が激しかった時代には、それは重い意味を持っていたにちがいない。新進気鋭の学者ヤーコプ・グリムは、中世の文献を研究する中で、繰り返し現れるこのモティーフ［友情］の重要性に気付いたのである。

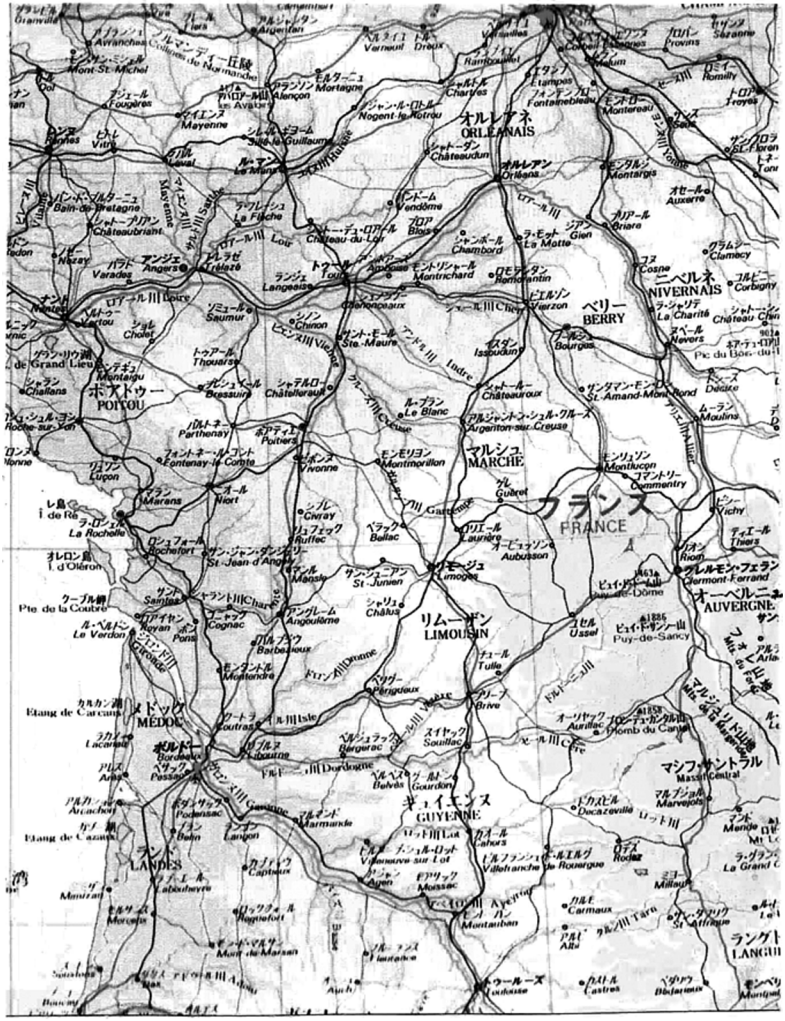
他方で『忠臣ヨハネス』は、AT五一六「忠実なジョン［ヨハネス］」Faithful Johnの話型そのものとなっている。[33]斬首された人間が生き返るモティーフは右の『二人兄弟』にも入っているが、中世の有名な叙事詩『哀れなハインリヒ』との類似性は、グリム自身が注釈しているように、このKHM六番では一層明白である。

『二人兄弟』の兄、そして『忠臣ヨハネス』のヨハネスの友情と真心、これこそが奇跡を呼び生命を蘇らせる原動力であった。物語の聞き手あるいは読み手は、それに強く心を捉えられ、世代から世代に物語が伝えられる中に、友情はいつしか民族の共有財産となっていったのであろう。中世伝説から昔話が芽生えるにしろ、あるいは逆に、昔話の祖型が伝説の中に摂取されるにしろ、友情という人類普遍のテーマは、石化や斬首といった極端かつ残酷なストーリー展開の中で、いよいよその重要性を増していったにちがいない。

2 『大きな足のベルタ』Berte aus grans piés

カロリング朝の時代のフランスの伝説『大きな足のベルタ』は次のような内容である。（地図2参照）

女主人公ベルタはハンガリーの王女で、フロワールとブランシュフロアの娘である。王女は非常に美しかったが、不均衡な、もしくは並はずれて大きな足をしていた。それゆえ「大きな足の」aus grans piésあるいはas gran piéという綽名を持っていた。フランク王国の王ピピン［三世］が王女に結婚を申し込む。彼女は乳母のマルギステとその娘アリステをお供に、ピピンと結婚するために両親に送り出される。結婚式のあと、マルギステはベルタに、王は結婚の初夜に彼女を殺すだろうと吹き込む。彼女はそれゆえアリステと役割を交換することになる。翌朝、ベルタが寝室に入ろうとすると、アリステはベルタが彼女を殺そうとしていると主張する。王は召使たちにベルタをルマンの森へ連れて行かせる。そこで彼女は殺されることになる。殺害が実行された証拠に、マルギステは犠牲者の心臓を要求する。召使たちは若い王妃を自由の身にする。彼らは猪を殺して、その心臓を証拠として示す。ベルタは森をさまよい、ついに森番シモンの家族に迎


オルレアネ
ORLEANAIS
ベリー
BERRY
ニベルネ
NIVERNAIS
ポアトゥー
POITOU
マルシュ
MARCHE
フランス
FRANCE
リムーザン
LIMOUSIN
オーベルニュ
AUVERGNE
メドック
MÉDOC
ギュイエンス
GUYENNE
ランド
LANDES
マシフ・サントラル
Massif Central

地図 2

え入れられ、そこで家の仕事をしながら数年を過ごす。ベルタの母親がパリへ旅して、病気と称して薄暗い部屋のベッドに横たわっていたアリステの足を見て、彼女が自分の娘ベルタではないことを知る。策略が発覚したあと、乳母マルギステと彼女の従兄テュベルトは死刑を宣告される。ピピンの子供を産んでいたアリステは尼僧になる。ピピンとアリステの息子たちはレンフロワおよびウドリと名付けられる。ベルタは、ルマンの森で狩りをしている間に迷ったピピンによって発見される。すぐにベルタが好きになった王は、彼女を望むが、彼女に自分を明かさない。ベルタはもう一度フランク王国にやって来たハンガリーの王妃によって彼女の娘であることが証明される。[34]

この物語の最古のテクストは『サントンジュ年代記』Chronique saintongeaise（一二二五年頃）とされる。[35] サントンジュはフランス西部の旧地方名で、現在はシャラント・マリティーム県（ジロンド川河口地域）である。また物語の最も詳しい伝承は、現在は中部ベルギーであるブラバントのアドネ・ル・ロワ Adenet le Roi の叙事詩『大きな足のベルタ』Berte aus grans piés（一二七五年頃）であるが、それ以外にも、イタリア、スペインそしてドイツに物語は広く伝播している。ドイツではフランケン出身の詩人シュトリッカー Stricker の叙事詩『カール大帝』Karl der Große（一二二三〇年頃）が一番古い記録である。[36]

『グリム兄弟の蔵書』には、次の文献が収められている。

＊ADENET LE ROI : Li romans de Berte aus grans piés, préc. d'une dissertation sur les romans des douze pairs ; par Paulin Paris, Paris, 1832. [1342]

アドネ・ド・ロワ『大きな足のベルタの物語』十二人の大貴族の物語に関する論文付、ポーラン・パリ編、パリ、一八三二年。[一三四二番][37]

＊ARETIN, Johann Christoph Frhr von : Aelteste Sage über die Geburt und Jugend Karls des Grossen. Zum 1. Male bekannt gemacht u.erl. München, 1803. [5653]

ヨハン・クリストフ・フォン・アレティン男爵『カール大帝の誕生と青年時代に関する最古の伝説』初めての公表と解説、ミュンヘン、一八〇三年。[五六五三番][38]

＊Der Stricker : Karl der Grosse. Hrsg. von Karl Bartsch.

Quedlinburg, Leipzig : Basse 1857. [2696]
デア・シュトリッカー『カール大帝』カール・バルチュ編、クヴェトリンブルク、ライプツィヒ、バッセ社、一八五七年。[二六九六番][39]

さて、物語はカロリング朝第一代の国王ピピン Pippin（フランス名ペパン Pépin）三世（＝小ピピン）をめぐって展開される。中世の民間伝承では、前述のように、カール大帝とピピン三世そしてカール・マルテルはしばしば混同されていたようだが、歴史上の記録をあらためて整理するとこうなる。

七一四年に亡くなったピピン二世には二人の妻、正妻プレクトルディス Plektrudis と側室カルパイダ Chalpaida がいた。カール・マルテルは側室の子である。またカール・マルテルと彼の正妻クロトルト Chrotrud との間には二人の息子カールマン Karlmann と小ピピンがいた。伝承によれば、カール・マルテルの母親は中ピピンの正妻に激しく迫害されたらしい。二人の庶子、ラギンフレト Raginfred とヒルペリック Hilperick、ベルタ伝説ではレンフロワとウドリは、彼らの父親から死刑を宣告され、アルデンヌ［ベルギーとフランスの間の高地］に逃げたと言われる。[40]

『大きな足のベルタ』伝説では、フランク国王ピピンの許にハンガリーの王女（ベルタ）が嫁入りするが、お供をした乳母とその娘の策略によって、彼女は王妃の地位を奪われる。しかし最後に、母親（ハンガリー王妃）が、足の大きさからピピンの自称妃が彼女の娘ではないことを発見し、乳母とその娘の虚偽が暴かれる。

歴史を振り返ると、ピピンの時代、現ハンガリーはアヴァール王国（五～九世紀）の中心地であった。アヴァールはアジア系遊牧民で、中・東部ヨーロッパに進出したが、七九一年カール大帝に破れ、フランク人に服属した。その後八九六年、マジャール人が侵入してハンガリー王国を築き、十世紀末にはキリスト教化が進んだ。先のベルタ伝説はそうした民族の興亡を背景に生まれたのであろう。ちなみに、『ドイツ伝説集』第二巻には、カール大帝の東方遠征の物語「ハンガリーから帰還するカール」（DS四四四）が収録されている。

ところで、ベルタ伝説は昔話というジャンルにとってきわめて重要な要素を多く含んでいる。とりわけ、「すり替えられた花嫁」（ドイツ語 Die unterschobene Braut／英語

The Substituted Bride）のモティーフ[41]がそれで、アールネ／トンプソンの話型ＡＴ四〇三「黒い花嫁と白い花嫁」The Black and the White Bride の中核をなしている[42]。グリム童話では、ＫＨＭ一三「森の中の三人の小人」Die drei Männlein im Walde およびＫＨＭ一三五「白い花嫁と黒い花嫁」Die weiße und die schwarze Braut がこの話型に属しているが、ＫＨＭ八九「がちょう番の娘」Die Gänsemagd も、ＡＴ番号は五三三「話をする馬の首」に分類されてはいるものの、内容的には「すり替えられた花嫁」物語である。本稿ではベルタ伝説との関係から、このＫＨＭ八九を覗いてみることにしたい。『がちょう番の娘』は次のような物語である。

昔、寡［やもめ］の妃に美しい姫がいた。姫は遠い国の王子に嫁ぐことになる。装飾品などを荷造りし、姫は腰元を一人連れて出発する。姫の馬はファラダという名で口がきけた。母親の妃は自分の指を切って血を三滴布に垂らし、それを姫に渡した。旅の途中、姫は喉が渇き腰元に水を頼むが、言うことを聞いてくれない。仕方なく姫が自分で小川の水を汲んだとき、例の布が懐から落ちて流される。腰元はそれを見て、姫が力を失ったことを知り、衣装を姫のものと取り換え、自分がファラダに乗る。本当の花嫁は駄馬で王子の許に着く。腰元にされた姫はがちょう番の男の子の手伝いをする。偽の花嫁は口封じのためにファラダを王子に殺させる。姫は馬の首を町の門に掛けてもらい、朝夕、がちょうを追ってそこを通るとき、首と話をする。ある時、王様はがちょう番の娘（＝姫）が馬の首と会話していることを男の子から聞く。真実を話させるために、王様は鉄のストーブに娘が苦しい胸の内を吐露するように言い、煙出しでそれを聞く。真実を知って、王様は彼女に姫の衣装を着せさ、王子に本当の花嫁を教える。饗宴が催され、食事のあと、王様は主人を裏切った女にはどのような罰が相応しいか、偽の花嫁に尋ねる。そういう女は裸にして内側に釘を打った樽に詰め馬に曳かせ殺すのがよい、と彼女は答える。その通り処刑が執行される。若い王様は本当の花嫁と結婚し、幸せに国を治める[43]。

グリム兄弟はこの昔話をドロテーア・フィーマンから聞いて書き留めたようだが[44]、豊かなイメージに包まれた心に沁み入る物語である。「話をする馬」（ファラダ）について、

グリムはＫＨＭ八九「原註」の中で、馬の首をお守りに立てておく古代北方の慣習（サクソ・グラマティクス『デンマーク人の事蹟』等）を紹介し[44]、註の最後にこう記す。「自分の召使に追放され、粉挽き小屋で糸紡ぎや機織りをしたピピンの婚約者ベルタに関するこのカロリング朝の神話を厳密に検討すると、主な内容からして明らかにそれと関連がある我々の昔話は、より古代的でより美しくより素朴であると言ってよいであろう[45]」。

腰元に妃の座を奪われてもなお気品を失わず、運命に耐え、最後に幸せを掴む女主人公の姿（グリムもその「気高さ」die Hoheit の美を称えている[46]）は、ある意味で、世界中に類話が存在するシンデレラ型（ＡＴ五一〇）に似てなくもない。昔話の聞き手や読者は、がちょう番の娘あるいは灰かぶりの境遇に深く共感しながら、人生の苦難と幸福に関して、大切な何かを学び取ってゆくにちがいない。グリム兄弟はこの物語の祖型を彼らの時代からほぼ一千年前のカロリング朝のベルタ伝説に見出したが、最後に、伝説の題名ともなっている「大きな足」と「すり替えられた花嫁」のモティーフについて、幾つか解釈を紹介したい。

フランク王国のピピンの許へ輿入れしたハンガリー（アヴァール）王国の王女ベルタは、様々な苦難を味わったあと、彼女の母親によってその存在を確認される。その際目印になったのは〈大きな足〉であった。一説によると（A. Feist[47]）、ベルタはゲルマン神話のペルヒタ Perchta に関連があると言う。ペルヒタ（あるいはベルヒタ Berchta）は南ドイツ（バイエルン）およびオーストリアの民間伝承に登場する老婆で、怠け者の糸紡ぎ女や子供たちを脅し、勤勉な者には贈り物をくれると伝えられる[48]。ヤーコプ・グリムの『ドイツ神話学』Deutsche Mythologie によれば、彼女はしばしばホレおばさん Frau Holle（ＫＨＭ二四）とも同一視され、がちょうのような大きな足を特徴としていた[49]。ペルヒタもホレおばさんも糸紡ぎと縁が深く、大きな足は糸紡ぎの作業の結果とも見做されている（ＫＨＭ一四『三人の糸紡ぎ女』[50]）。ベルタが森番の家族に迎えられて、その家で糸紡ぎと機織りをするイメージは、まさにペルヒタ＝ホレおばさんのそれと二重映しになる。ただし、糸紡ぎ器械は十五世紀の発明で、それ以前に成立した物語に、糸紡ぎ＝大きな足の等式は妥当しないと反論する向きもある（P.Arfert[51]）。

一方、〈すり替えられた花嫁〉については、歴史的な背

景があるようだ。ピピン（三世）の婚姻関係とカール大帝の誕生をめぐっては、古来、伝承が少なく不明な部分が多いとされるが、十一／十二世紀に吟遊詩人［ジョングレール］によって完成を見たベルタ伝説[52]は、カロリング朝やフランス王家の家系図における側室とその子供の問題と密接な関係があるらしい。つまり、財産分割が絡んでいるのである。古いゲルマン民族の貴族階級においては、一夫多妻制が、政治的な理由もあって、一定の役割を果たしていたと言われるが、ゲルマン人が改宗した後、教会は一夫一妻制を推進し、自由な婚姻を敵視した。メロヴィング朝とカロリング朝の側室たちの存在は、それゆえ、こうした時代の転換期には異教的－ゲルマン的なものの名残と見做され、キリスト教化が進んだ十三世紀頃にはもはや理解し難いものとなっていた[53]。〈すり替えられた花嫁〉の物語は、妃の座をめぐる熾烈な争いの中で、歴史の闇に葬り去られた本当の花嫁、あるいは偽の花嫁の過酷な運命と悲哀を、昔話の衣装に包んで、後世に伝えているのかも知れない。

3 『ゲノフェーファ』Genovefa（Genoveva）

ブラバント地方［中部ベルギー］に由来するとされる『ゲノフェーファ』[54]伝説は、「罪もなく中傷され迫害された妻」Die unschuldig verleumdete und verfolgte Frau の典型タイプで、ドイツではきわめて人気が高い（ティーク、ヘッベル等[55]）。アールネ／トンプソンの話型では七一二番「クレシェンティア」Crescentia＝The slandered and banished wife に分類されている[56]。EMで紹介されているマルティン・フォン・コッヘム［一六八七年］の内容は次のようである。（地図3参照）

七五〇年頃、ジークフリート伯爵はブラバント公爵の娘である彼の敬虔な妻ゲノフェーファとトリーアの地に暮らしていた。伯爵が戦争に出陣しなければならなくなったとき、伯はゲノフェーファを彼の家臣ゴローに託した。ところがゴローはゲノフェーファへの恋に燃え、拒絶されると、あろうことか、彼女に料理人ドラーゴとの密通の罪をきせ牢獄に放り込ませる。

ドイツ連邦共和国
FEDERAL REPUBLIC OF GERMANY
NIEDERSACHSEN
NETHERLANDS
RUHR
NORDRHEIN-WESTFALEN
HESSEN
BELGIUM
LUXEMBOURG
RHEINLAND-PFALZ
SAARLAND
LORRAINE
ALSACE
バーデン・ビュルテンベルク

地図 3

ゴローの誹謗と魔法使いの女の欺瞞—それによると、ドラーゴは牢獄で生まれたゲノフェーファの息子シュメルツェンライヒ［〈苦痛に満ちた〉の意］の父親とされる—の言葉に憤激して、伯はゲノフェーファを子供もろとも即座に処刑せよと指示する。同情を覚えた召使たちは、森を離れないという条件つきで、二人を生かしておく。刑が執行された印に、召使たちはゴローに犬の眼と舌を持って行く。ゲノフェーファは長い間さまよったあと、洞穴を見つける。雌鹿が子供に授乳してくれる。天使がゲノフェーファに十字架を渡す。狼が羊の毛皮を運んでくれる。彼女はそれでシュメルツェンライヒを覆うことが出来た。［城に］帰った伯は彼の決断が正しかったかどうかに悩む。とりわけ、ゲノフェーファの残された手紙が彼女の潔白を確証する。七年後、彼は狩りの際に雌鹿を追う。雌鹿は彼をまっすぐゲノフェーファの洞穴に導いてゆく。彼はそれが妻であることに気づき、彼女を息子ともども城に連れ帰る。ゴローは罰として、四頭の雄牛に引き裂かれる。ゲノフェーファは少しの間だけ生き延びる。すなわち、マリアが顕現し、聖母によって自身が天使と共に天国に導かれてゆくのを見たすぐ後に、彼女は亡くなる。伯は亡き女［ひと］のために一つの教会、聖母教会を捧げる。そして彼の生涯を息子と共にゲノフェーファの洞穴の中で隠者として終える。[57]

ゲノフェーファ伝説の歴史的な背景をめぐっては、様々な議論がなされたが、結局、それらは十四世紀後半に編纂されたテクストを典拠としていた。ドイツ西部、ライン河畔のボンから遠くはないマリア・ラーハ Maria Laach 修道院に保存されていた幾つかのラテン語の手稿、おそらくラーハの修道僧あるいは近隣の聖母教会の聖職者によって一四〇〇年頃に書かれたそのテクストは、歴史上知られた人物と、マリア・ラーハの新たな創設者であるバレンシュテットのジークフリート（十一／十二世紀）、そして虚偽により姦通の罪を問われたブラバント（ドイツ西部に比較的近い）のマリア等が統合されたもののようだ。モティーフと物語の構成は、フランスのロマン『ローマの善きフィレンツェ女性』La Bone Florence de Rome（十三世紀前半）が模範と言われる。[58]

ゲノフェーファ伝説が一躍名を馳せるきっかけとなった

のは特に、フランスのイエズス会士ルネ・ド・セリジェ René de Cérizier（一六〇三―六二年）の物語『認められた無実あるいはブラバントの聖ジュヌヴィエーヴ』L'Innocence reconnue ou Vie de St.e Geneviève で、それはフランスとベルギーで何版も重ねた。一方、ドイツ語圏でゲノフェーファ伝説が有名になったのは、マルティン・フォン・コッヘム Martin von Cochem の『無実で騙されたプファルツ伯夫人聖ゲノフェーファ』Von der unschuldig betrangten H.Pfaltz-Gräfinen G.（一六八七年）（前述）が起点である。その後、無数の民衆本によって、ゲノフェーファ伝説はあまねく知られるところとなった。[59]

『グリム兄弟の蔵書』には次の文献が所蔵されている。

＊[GENOVEFA.] Eine schöne anmuthige und lesenswürdige Historia von der unschuldig bedrangten Heiligen Pfalzgräfin Genovefa...Augspurg 1802. [2171]

『[ゲノフェーファ] 無実で追放されたプファルツ伯夫人聖ゲノフェーファに関する美しくも優雅で読むに値する物語』、アウクスブルク、一八〇二年 [二一七一番][60]

＊Zacher, Julius : Die Historie von der Pfalzgräfin Genovefa. Ein Beitr. zur deutschen Literaturgeschichte und Mythologie. Königsberg : Schubert & Seidel 1860. [2172]

ユリウス・ツァッハー『プファルツ伯夫人ゲノフェーファの物語』ドイツ文学史および神話学への寄与。ケーニヒスベルク、シューベルト／ザイデル社、一八六〇年 [二一七二番][61]

グリム兄弟は彼らの『ドイツ伝説集』の中に『ジークフリートとゲノフェーファ』Siegfried und Genofeva（DS五三八番）を収録している。ただし出典はマルティン・フォン・コッヘムではなく、M・フレーア Freher 編『パラティーナ原典草稿』Originum Palatinarum commentarius（一六一二／一三年）である。[62] 内容は殆ど同じだが、結末が異なっている。マルティン・フォン・コッヘムの物語では、ゲノフェーファが亡くなったあと、伯は聖母教会を建立して、残りの人生を息子と共にゲノフェーファの洞穴で隠者として暮らしたことになっているが、パラティーナ原典草稿に拠るグリムのテクストでは、その記述はなく、教会では「多くの奇跡」が行われた、と結ばれている。

グリムは「トリーアの大僧正がヒルドルフであった時

代」、とゲノフェーファ伝説を書き出している。それに対して、マルティン・フォン・コッヘムの物語では、「七五〇年頃」と具体的に年号が明記されている。七五〇年頃と言えば、ピピン三世［小］がソワソンでフランク人の王に選ばれ、ボニファティウス大司教によって聖油を受けた（七五一年）時代である。[63] また前述のフランス・ロマン『ローマの善きフィレンツェ人』は、カール大帝をめぐる伝承圏のシビラとベルタ伝説にその物語を遡るとされる。[64] いずれにせよ、物語はカロリング朝のものである。

さて、カール大帝の母ベルタ［史実上はベルトラーダ］は、ピピン三世の正妻で、この小ピピンの父カール・マルテル［大帝の祖父］は中ピピン［二世］の側室の子であった。先にも触れたように、この側室は中ピピンの正妻に迫害され、二人の庶子は父王に死刑を宣告されてアルデンヌの山地に逃れたと伝えられている。[65] この山地は、ブラバントのゲノフェーファが伯爵の家臣ゴローに無実の罪を着せられて逃れ、息子シュメルツェンライヒを産んだ場所であった。[66] カロリング朝の伝説圏では人物がよく混同されたこともあり、ゲノフェーファ伝説も、時代的に見て、ベルタ伝説とどこかで繋がっている可能性も否定出来ない。ともあれ、「無実で中傷され迫害された花嫁」の昔話タイプは、様々なヴァリエーションの中で、ヨーロッパの民間に広く知れ渡り、久しく親しまれてきたのだが、意外なことに、グリム兄弟はＫＨＭ二一番『灰かぶり』Aschenputtel「原註」の中で次のように記している。

「有名な聖ゲノフェーファ伝説を思い出させる他の結末を、メクレンブルクの四番目の物語は持っている。灰かぶりは王妃となり、魔女である彼女の継母と意地悪な異母姉妹を自分のところに引き取る。彼女が息子を生んだとき、継母と姉妹は一匹の犬を代わりに置き、子供を庭師に預け、彼に母親とその子供を殺すように言う。二度目［に子供を産んだとき］も同じだった。王様は彼女を大いに愛していたので、今一度そのことには沈黙を守った。三度目に、継母と姉妹が王妃を子供共々庭師に預けて殺すように言ったとき、彼は母親と子供を森の洞穴に連れて行く。王妃が悲しみのあまり乳が出なくなると、彼女は洞穴にいた雌鹿の側に子供を横たえた。子供は成長し、野生的に髪を長く伸ばして、彼の母親のために森で薬草を探し求めた。ある時、その子は城へ行き、王様に彼の美しい母親のことを物語った。王は尋ねた。〈おまえの美しい母御はどこにいるのか

ね？〉〈森の洞穴の中だよ。〉〈そこに私も行こう。〉〈はい、でも母さんが着ることが出来るように、外套を持ってきてね。〉王様は出かけ、すっかり痩せてはいたが、彼女だと分かり、一緒に連れて行った。途中、金髪の二人の男の子に出会った。〈おまえたちは誰の子かね？〉〈庭師だよ。〉庭師が来て、男の子が王様の子供たちであることが分かる。彼は子供たちを殺さずに自分の手許で育てていたのだった。真実が明るみに出、魔女は娘と共に罰せられた[67]」。

ドイツ北東部、バルト海沿岸のメクレンブルク地方の『灰かぶり』［シンデレラ］物語の中に、グリム兄弟はゲノフェーファ伝説の類話を発見したのである。これは女主人公が王妃となった後の展開で、これを見ると、昔話と伝説という口承文芸の二大ジャンルが、その起源においていかに複雑に絡み合っているかが分かる。KHM「原註」の中で、グリム兄弟はしばしば、こうした予想外の発見を紹介しながら、遠い昔の伝説と昔話との接点に鋭い観察眼を向けていたのである。

もう一篇、グリム兄弟編『ドイツ伝説集』には、カール大帝をめぐる興味深い物語が収められている。DS四四二「ヒルデガルト」Hildegardがそれである。ヒルデガルトは大帝の実際の妃で、七八三年に没しているが、物語は以下の通りである。

カール大帝がザクセンへ遠征した留守の間に、美しい妃はカールの異母弟ターラントに言い寄られる。妃は機転を利かして彼を牢に閉じ込めるが、大帝が凱旋することになり、義弟を牢から出す。しかし逆に、義弟は妃を尻軽女と中傷して帝に密告する。妃は国外に追放され、帝は彼女の眼を潰すように命じる。貴人が現れ、その代わりに犬の眼を差し出す。妃は森に逃れ、その後、ローマへ行き、薬師の技によって名医となる。そこに失明し癩［ハンセン］病に罹ったターラントが帝と共にやって来る。義弟は治療を受け回復するが、聖ペトロ寺院[68]で、妃は帝に義弟のことを打ち明け、義弟は流刑となる。

まさしくゲノフェーファの類話だが、物語の舞台はローマにまで及び、一種の聖者伝の趣を呈している。誹謗による誤解、追放と処刑、証拠としての動物の身体、森の生活、薬草摘み、最後に救済。こうした一連のモティーフ群が、ゲノフェーファ伝承圏では、伝説にも昔話にも繰り返し現

れている。〈無実で中傷され迫害された花嫁〉という中心テーマが、ベルタ伝説の場合と同様に、フランク王国の歴史的な出来事を背景に、紆余曲折のあるストーリー展開の中で、興味深く、ある意味、生々しく物語られているために、ゲノフェーファ伝説は、時代を超えて語り継がれてきたのであろう。不倫の愛を拒絶されたために、逆に、不義の罪を無実の相手に擦り付ける話は、聖書でも馴染みのテーマだが（旧約聖書続編「ダニエル書補遺」「スザンナ」等）、ゲノフェーファ伝説は中世におけるその典型例を示している。ちなみに、グリム兄弟編『ドイツ伝説集』には、姦通等、男女の愛の負の局面にまつわる物語が少なくない[69]が、それらの伝承も、現実に起こった事件と何らかの関わりを持っているにちがいない。それにしても、愛の縺れは人々の関心を永遠に惹きつけてやまないテーマのようだ。

結語

初期の論文『古い伝説の一致について』の中で、ヤーコプ・グリムが注目した物語、『アミクスとアメリウス』、『大きな足のベルタ』そして『ゲノフェーファ』はいずれも、以上見てきたように、カール大帝の時代に由来する伝説であった。七五一年、大帝の父ピピン三世によって興されたカロリング朝は、「ヨーロッパの誕生」にとって「根本的な意味」を持つ時代であった。そしてピピン三世の後を継いだカール大帝は、今日のドイツ、フランスおよびイタリアを核にしたヨーロッパ中央部にフランク王国を築き、文字通り「ヨーロッパの父[70]」となった人物であり、いわゆるコスモポリタンであった。晩年（七九四年以降）彼が宮廷を構えたアーヘンには、各国から有名な学者が集結した。イギリス［アングロ・サクソン］はヨーク出身の神学者アルクイン Alkuin(us)（七三〇年頃―八〇四年）、スペイン出身でフランス、アンジェあるいはルマンで没した著作家オルレアンのテオドゥルフ Theodulf von Orléans（七六〇年頃―八二一年）、イタリア［ランゴバルト］出身の歴史家パウルス・ディアコヌス Paulus Diaconus（七二〇年頃―七八七以後）、そしてドイツではアインハルト Einhard（七七〇年頃―八四〇年）。彼は七九四年頃、フルダの修道院から大帝の宮廷に招かれ、『カロルス大帝伝』Vita Caroli Magni を残した。それは中世で最初の君主の伝記として有名である[71]。

フランク王国の国王カール大帝は、中世ヨーロッパにおける「理想的支配者」像のトポスともなったが、その姿は、ブリトンの神話的英雄であるアーサー王と好一対をなしていた。[72] カール大帝は何と言っても歴史上の人物であり、その拠点は王国の東側、ゲルマンの地にあったのに対して、ケルト系のアーサー王は、島［イギリス／アイルランド］から大陸［フランス・ブルターニュ半島］へ、すなわち西側を拠点にその名が知られていった。カール大帝とアーサー王はまさしく中世ヨーロッパの二大英雄なのだが、前者カール大帝を中心にしたカロリング朝の文化は、後者アーサー王をめぐる聖杯伝説圏とは別に、伝承文学の豊かな起源となっていた。若きヤーコプ・グリムはこの事実に気付いたのである。口承文芸、特に昔話の発生は、当時はもちろん、今日なお未だ歴史の闇の中に埋もれているが、[73] ヤーコプは中世の文献研究から、その闇に光を当てたのだった。

「昔話はより詩的 poetisch で、伝説はより歴史的 historisch である」と彼は『ドイツ伝説集』第一巻「序文」の中で語る。[74]〈歴史的〉要素を孕むジャンルである伝説 Sage は、換言すれば、〈詩的〉な抽象化を経たジャンルである昔話 Märchen（M・リューティ）[75] の現実的な土台とも言える。例えば、グリム童話『二人兄弟』は中世伝説『アミクスとアメリウス』を、『がちょう番の娘』は『大きな足のベルタ』を、『灰かぶり』類話（「原註」）は『ゲノフェーファ』伝説を何らかの意味で祖型としている。そういうわけで、伝説を透かして昔話を再読するならば、我々はメルヘンの魅力を一層深い次元から味わうことが出来るにちがいない。伝説には往時の生々しい現実が隠れているからである。文献学者であったヤーコプ・グリムは、すでに若くして、歴史と詩、現実と物語の狭間に、カロリング朝の伝承文学が位置していることを発見したのである。

カロリング朝は元来、マース川とモーゼル川の間の地域を本拠地とする。[76] ドイツ、ベルギー、オランダそしてフランス、いずれにも近いこの地方は、宮廷のあったアーヘン同様、ゲルマン的要素とガリア的要素の中間地点に位置して、多様な文化を統一的に把握する格好の場所でもあった。ヤーコプ・グリムは出世作『古い伝説の一致について』をこう締め括る。「昔の出来事の反響はむしろ民族全体に広まっており、あらゆる機会に、おのずから無意識なやり方で、己を告げる」、[77] と。いわゆる民族の「集合的無意識」

である、しかもカロリング朝において、この「集合的無意識」はフランク王国を形成する多民族のそれで、地理的・空間的に西欧の中心部を殆ど包括している。

中世ヨーロッパの伝承圏は、今日から見ても、一般の予想を遥かに超えて、互いに密なネットワークを有していた。それにはもちろん、当時の知識人の共通言語としてのラテン語が大きく寄与していたが[78]、この共通語を媒介に、各地に発生した物語は、波乱万丈のストーリーの中、人々に物語を聞く楽しみを贈るとともに、人生の意味を普遍的に深く問い返す機会を与えた。カロリング朝の伝説は、そういう要素を少なからず内包していたのである。それから一千年後、ドイツ・ロマン派の詩人ノヴァーリスが構想したヨーロッパ（本稿「序」）あるいは批評家フリードリヒ・シュレーゲルが文芸雑誌によって開拓しようとしたヨーロッパ、このヨーロッパをグリム兄弟は文献学に基づく伝承文学研究の視点から掘り起こし、カロリング朝の伝説群にその鉱脈を発見したのである。

註

（1）Novalis Werke. Herausgegeben und kommentiert von Gerhard Schulz, Verlag C.H.Beck, Munchen, 1969, S.499.

（2）Becher/Karl der Grosse. エインハルドゥス／ノトケルス『カロルス大帝伝』國原吉之助訳・註、筑摩書房、一九八八年

（3）詳しくは拙論「F・シュレーゲルのフランス紀行」（『ヨーロッパ文化研究』二〇〇三年三月所収）参照

（4）Ernst Robert Curtius, Friedrich Schlegel und Frankreich : in > Kritische Essays zur europäischen Literatur, Fischer Taschenbuch Verlag, Frankfurt a.M., 1984. S.78–94.

（5）J.Grimm/KS, Bd.4, S.9–12.

（6）主要参考文献参照

（7）同

（8）例えば、四四二～四五〇番

（9）Bibliothek 参照

（10）邦訳『グリム兄弟メルヘン論集』高木昌史・高木万里子編訳、法政大学出版局、二〇〇八年、六頁

（11）詳しくは拙論「昔話の比較研究―歴史・目的・方法」（『民俗学研究所紀要』、第三十四集、平成二十二年三月所収）参照

（12）Jacob Grimm/Wilhelm Grimm, Schriften und Reden., Ausgewählt und herausgegeben von Ludwig Denecke, Philipp Reclam, jun. Stuttgart, 1985. S.266.

(13) 註（10）三一四頁
(14) 註（11）参照
(15) 註（10）四頁
(16) EM, Bd.1, S.455f.
(17) a.a.O., S.454.
(18) 註（5）参照
(19) 『アミとアミルの友情』神沢栄三訳（『フランス中世文学集』3、白水社、一九九一年所収）
(20) 註（5）参照
(21) Bibliothek, S.139.
(22) EM, Bd.2, S.157.
(23) KHM/BDK, S.275–295.
(24) a.a.O., S.967.
(25) HdA, Bd.1, S.1447–1449.
(26) J.Grimm, DR, Bd.1, S. 230–234.
(27) 同
(28) 註（16）S.454.
(29) KHM/BDK, S.45–53.
(30) KHM/BDK, S.879.
(31) KHM/Uther, Bd.4, S.121.
(32) AT, p.96.
(33) AT, p.183–184.
(34) EM, Bd.2, S.156.
(35) a.a.O., S.156.
(36) a.a.O., S.157.
(37) Bibliothek, S.141.
(38) a.a.O., S.456..
(39) a.a.O., S.234.
(40) EM, Bd.2, S.157.
(41) a.a.O., S.160.
(42) AT, p.132–134.
(43) KHM/BDK, S.385–391.
(44) a.a.O., S.1017.
(45) a.a.O., S.1017.
(46) a.a.O., S.1016.
(47) EM, Bd.2, S.158.
(48) HdA, Bd.6, S.1478–1491.
(49) J.Grimm, DM, Bd.1, S.344.
(50) KHM/BDK, S.84–86.
(51) EM, Bd.2, S.159.
(52) a.a.O., S.160.
(53) a.a.O., S.160.
(54) EM, Bd.5, S.1003.
(55) Frenzel, S.238–241.
(56) AT, p.247–248.
(57) EM, Bd.5, S.1003f.

(58) a.a.O., S.1004.
(59) a.a.O., S.1005–1007.
(60) Bibliothek, S.199.
(61) a.a.O, S.199.
(62) DS/BDK, S.613.
(63) dtv/Atlas, Bd.1, S.123.
(64) EM, Bd.5, S.1004f.
(65) EM, Bd.2, S.157.
(66) EM, Bd.5, S.1004f.
(67) KHM/BDK, S.896.
(68) DS/BDK, S.481f.
(69) 例えば、DS四〇四、四六五、四八〇、四八二等
(70) EdMA, Bd.2, S.316f.
(71) Brockhaus-Lexikon, Bd.4, S.313.
(72) EM, Bd.7, S.981f.
(73) Heinz-Albert Heindrichs: Märchen und Mittelalter-gestern und heute, in; Als es noch Könige gab[Die Europäische Märchengesellschaft, Bd.26], Heinrich Hugendubel Verlag, Kreuzlingen/ München, 2001, S.17.
(74) DS/BDK, S.11.
(75) Max Lüthi, Das europäische Volksmärchen, 8.Aufl., Francke Verlag, Tübingen, 1985, S.25–36.
(76) EdMA, Bd.2, S.316f.
(77) J.Grimm/KS, Bd.4, S.9–12.
(78) EdMA, Bd.2, S.3.

主要参考文献［略号付］

*Enzyklopädie des Märchens, hrsg. von Kurt Ranke, Walter de Gruyter, Berlin/NewYork, 1977ff. (EM)

*Johannes Bolte und Georg Polivka, Anmerkungen zu den Kinder-und Hausmärchen der Brüder Grimm, 5Bde., Neudruck, Georg Olms Verlag, Hildesheim/New York, 1982. (B/P)

*Antti Aarne and Stith Thompson, The Types of the Folktale, Helsinki, 1987 (1961, Second Revision). (AT)

*Die Bibliothek der Brüder Grimm, Erarbeitet von Ludwig Denecke und Irmgard Teitge, hrsg. von Friedhilde Krause, Wissenschaftliche Verlagsgesellschaft, Stuttgart, 1989. (Bibliothek)

*Brüder Grimm, Kinder-und Hausmärchen, Ausgabe letzter Hand mit den Originalanmerkungen der Brüder Grimm, 3 Bde., hrsg. von Heinz Rolleke, Philipp Reclam jun., Stuttgart. (KHM/Reclam)

*Kinder-und Hausmärchen, gesammelt durch die Brüder Grimm. Vollständige Ausgabe auf der Grundlage der dritten Auflage (1987), hrsg. von Heinz Rölleke, Deutscher Klassiker

Verlag, Frankfurt am Main, 1985. (KHM/BDK)
*Brüder Grimm, Kinder-und Hausmärchen, 4Bde., hrsg. von Hans-Jörg Uther, Eugen Diederichs Verlag, München, 1996, (KHM/Uther)
*Deutsche Sagen, hrsg. von den Brüder Grimm, Ediert und kommentiert von Heinz Rölleke, Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt am Main, 1994. (DS/BDK)
*Brüder Grimm, Deutsche Sagen, 3Bde., hrsg. von Hans-Jörg Uther, Eugen Diederichs Verlag, 1993. (DS/Uther)
*Jacob Grimm, Deutsche Mythologie, 3Bde., Olms-Weidmann, Hildesheim/Zürich/New York, 2003. (J.Grimm/DM)
*Jacob Grimm, Deutsche Rechtsaltertümer, 2Bde., Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, 1994. (J.Grimm, DR)
*Jacob Grimm, Kleinere Schriften, 8Bde., Olms-Weidmann Verlag, Hildesheim/Zürich/New York, 1992. (J.Grimm/KS)
*Wilhelm Grimm, Kleinere Schriften, 4Bde., Olms-Weidmann Verlag, Hildesheim/Zürich/New York, 1992. (W.Grimm/KS)
*dtv Brockhaus Lexikon, 20Bde., Deutscher Taschenbuch Verlag, Munchen, 1982. (Brockhaus-Lexikon)
*Handwörterbuch des deutschen Aberglaubens, 10Bde., hrsg. von Hanns Bächtold-Stäubli unter Mitwirkung von E.Hoffmann-Krayer, Walter de Gruyter Verlag, Berlin/New York, 2000. (HdA)
*Elisabeth Frenzel, Stoffe der Weltliteratur, 7.Aufl., Alfred Kröner Verlag, Stuttgart, 1988. (Frenzel)
*Enzyklopädie des Mittelalters, 2Bde., hrsg. von Gert Melville und Martial Staub, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, 2008. (EdMA)
*Gestalten des Mittelalters, Horst Brunner/Mathias Herweg (Hg.), Alfred Kröner Verlag, Stuttgart, 2007. (Gestalten)
*Wilhelm Volkert, Kleines Lexikon des Mittelalters, Verlag C.B. Beck, 4.Aufl., 2004.
(Volkert)
*Einhard, Vita Karoli Magni/Das Leben Karls des Großen, Lateinisch/Deutsch, Übersetzung, Anmerkungen und Nachwort von Evelyn Scherabon Firchow, Philipp Reclam jun. Stuttgart, 2010 (1968).
*Johannes Laudage/Lars Hageneier/Yvonne Leiverkus, Die Zeit der Karolinger, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, 2006.
*Michael Imhof und Christoph Winterer, Karl der Grosse. Leben und Wirkung, Kunst und Architektur, Michael Imhof Verlag, Petersberg, 2005.
*Matthias Becher, Karl der Grosse, 5.Aufl., Verlag C.H.Beck, München, 2007. (Becher/Karl der Grosse)
*Der Brockhaus Atlas zur Geschichte, 2.Aufl., hrsg. von der

Lexikonredaktion des Verlags, F.A.Brockhaus, Mannheim, 2007. (Brockhaus/Atlas)
*dtv-Atlas zur Weltgeschichte, 2Bde., Deutscher Taschenbuch Verlag, München, 1982/83.
(dtv/Atlas)
*エインハルドゥス／ノトケルス『カロルス大帝伝』國原吉之助訳・註、筑摩書房、一九八八年
*五十嵐修『地上の夢・キリスト教帝国』［カール大帝のヨーロッパ］、講談社、二〇〇一年
*ロバート・バートレット［図解］『ヨーロッパ中世文化誌百科』上・下、樺山紘一監訳、原書房、二〇〇八年
*ジャック・ル・ゴフ［絵解き］『ヨーロッパ中世の夢』樺山紘一・橘明美訳、原書房、二〇〇七年
*ミシェル・パストゥロー『ヨーロッパ中世象徴史』篠田勝英訳、白水社、二〇〇八年
地図1　［補遺］最新図説世界史、浜島書店、一九九四年
地図2／3　世界大地図帳　平凡社、一九八四年

注　グリム関係はすべて拙訳したが、特に、グリム『ドイツ伝説集』上・下桜沢正勝／鍛冶哲郎訳、人文書院、一九八七年を参照させていただいた。